

ものを言った大魚

（『たんなんの民話と伝説』 丹南ライオンズクラブ より）

当野の山頂付近には、いつの時代に造られたかわかりませんが「新池」「村池」など五つ六つの池があります。

当野との尾根を越えた三田の奥山という所にも「金剛寺池」と呼ばれる池のほか、数カ所に大きな池があり、昔はこの山上の池から水を落として稲を作っていました。

この池の水を抜くときは、滝が落ちるようにとっても美しい光景だったといわれています。

一方、当野の里には、今も通称「榧の木」「桃の木」と呼ばれる家があります。

この家と山頂にある池にからんで、こんな話が伝わっています。

昔々のこと、それぞれの池には「主」といわれる生き物が棲んでいたそうです。

ある日、魚取りの大好きな村の若者が、野を越え谷を越え山を越えて、大魚がいるという池にたどり着き、苦勞をしてようやく大魚を捕まえました。

満足して思わず、

「とうとうやった。早く帰って味噌汁にして食べよう。何人分くらいつくれるやろうな？」

と独り言を言いながら喜び勇んで帰る途中、ある池の横を通り過ぎようとした時、

「金剛寺さん、金剛寺さんどこへ何をしに行かれるのですか」

という声が池の中からしてきました。

その時、若者が抱えている大魚が、

「当野の榧の木へ味噌汁を吸いに行く」

と返事をしました。若者の驚きは、腰がぬけるほどで、家に帰ってからも二日・三日は起きあがれませんでした。

この若者は、榧の木と呼ばれる家の若者で、「金剛寺さん」と呼ばれた大魚は、金剛寺池の主であつたようです。池の中から声をかけたのは、その池の主ではないかと言われています。